詠む広場

毎日俳壇

片山由美子 選

手のひらに包みて仔猫貰ひけり　北本市　萩原　行博

△評▽生まれて間もない猫の子をもらってきたのだろう。てのひらに包んでしまえるほどの大きさというのが頼りなげである。

燕来る街に空き家がまたひとつ　志木市　谷村　康志

△評▽空き家が目立つ通りに今年もツバメがやってきた。飛び交う姿が街を活気づけるかのよう。

思ひ出す父の命日花曇　東京　郡司　正男

縺るるを風のゆるさず雪柳　大阪　芹澤　由美

父が吹けば子が追ひかけるしゃぼん玉　町田市　枝澤　聖文

昨日とは違ふ白なり白木蓮　東京　草野　准子

医師一人看護師二人春の風　さいたま市　根岸　青子

勝手口開ければ匂ひ沈丁花　日野市　田村登代子

晩年のしかと近づき豆の花　有田市　谷中　節子

菜の花やはじめましての声ふわり　大洲市　坂本　梨帆

小川　軽舟 選

子を持たぬふたりの住まい紫木蓮　つくば市　有阪　貴男

△評▽子を持たぬまま年をとった夫婦の住まいだと読んだ。2人だけではぐくんできた時間が紫のモクレンに香るようだ。

売店へ病衣に春のカーディガン　長岡市　勝沼　幸子

△評▽入院生活も長くなった。それでも春を迎えた喜びが先行きに希望を持たせてくれる。

筒鳥や林は人をやさしくす　嘉麻市　堺　成美

青竹の花器に一輪藪椿　町田市　枝澤　聖文

春の灯にしかけ絵本の森の木々　吹田市　三島あきこ

奥山の真白きままに牧開　松本市　神津　良子

胸反らすラジオ体操燕来る　姫路市　三木　崇弘

春寒の肩に責任載せてをり　大阪　福田　愛

入院の長引く窓辺鳥帰る　熊本市　三浦　洋

山城の曲輪に芽組む雑木かな　霧島市　内村としお

西村　和子 選

蕗味噌や母の味には遠けれど　東京　徳原　伸吉

△評▽それでもフキノトウが手に入れば毎年作って味わう。現実の味と、懐かしい味とが重なって深みのある味わいとなった。

しどけなく木蓮の散る陽気かな　沼津市　麻場　育子

△評▽あれほど輝いていた花が、散る時は誰も仰がない。「陽気」の一語が体感に訴えてくる。

雲上と云ふ高さまで揚雲雀　神戸市　田中　忠士

朝風呂の湯の柔らかし目貼り剝ぐ　岸和田市　掃部　敬治

まつすぐに伸びる天性チューリップ　高松市　島田　章平

遠くから子の声のして春田中　羽生市　岡村　実

轆轤挽きふと手を止めて初音かな　那須塩原市　森島　元一

香久山の雨に目覚めて梅開く　桜井市　田中富美雄

柳絮飛ぶ大阪城を描く子へも　高山市　直井　照男

声こぼし鳥入れ替はる椿かな　川口市　高橋さだ子

井上　康明 選

岩壁にザイルを手繰る山桜　高砂市　宮田　悦子

△評▽雪は溶け、岩場には岩登りを楽しむ青年たちが、頂を目指す。周囲の山桜が、ほつほつと岩登りの青年たちを彩っている。

鳥雲に子は新しい鞄手に　鎌ケ谷市　佐藤　紀子

△評▽子は新年度を迎え、心新たに職場へ通うのだろう。北へ帰る渡り鳥が雲に入る頃。

合格といふ別れあり出会ひあり　伊賀市　菅山　勇二

牛蛙月光を浴び釣られけり　名古屋市　可知　豊親

花人へ国宝の城明け渡す　豊田市　松本　文

菜の花に川風波のごと走る　久留米市　持地　恒美

春惜しむ台地に群れる牛の声　市川市　高野　厚夫

一片の雲の眩しき水の春　八街市　山本　淑夫

白い歯の兜太のかたへ花杏　松阪市　奥　俊

天守より高みへさくら吹雪かな　浜松市　久野　茂樹

新刊

＜句集＞

◇尾崎淳子『星置川』　第1句集。北海道で生まれ育ったおおらかさと画家ゆえのたしかな描写力が印象的な一冊である。△原野の汽車花火の町に入りにけり▽△ほつと月がある結婚歴がある▽△少年の老いて木の実を集めたる▽（本阿弥書店・3080円）

◇向瀬美音（企画、編集、翻訳）・中野千秋（翻訳）『国際俳句歳時記　秋』　「国境を越えた魂の震撼（しんかん）」という副題のある国際的なアンソロジー。「新米」「案山子」など日本でもおなじみの季語を用いた作品が並ぶ。インドネシア、フランスなどの作家らの作品を追うのが楽しい。（コールサック社・2750円）

◇坪内稔典『河馬100句』　既出の句を含めたカバの作品のみによる句集。△水ぬるむカバにはカバが寄り添って▽△なっちゃんもてっちゃんも河馬秋晴れて▽△水中の河馬が燃えます牡丹（ぼたん）雪▽。そこはかとなきペーソスがある。（象の森書房・1650円）

（俳人・櫂未知子）

＜歌集＞

◇久保田登『百花蜜』　木俣修、吉野昌夫を師として著者は傘寿となるまで長く歌に取り組んできた。身辺の出来事ばかりでなく終戦後ラーゲリより帰還した父や世界に広く目を向けて詠む。第6歌集。△ウクライナ産百花の蜜を朝食のパンに塗りつつ騒立ち易し▽（いりの舎・2750円）

◇桑山則子『桜だより』　108本の桜を訪ねた「桜行脚」、新古今集や西行、岡野弘彦の桜の歌についての文章などをまとめた「桜歌探訪」の2章の構成である。「桜行脚」では自作3首に写真を添える。△千年の命惜しまず与へこよ花ふらしくる薬師の桜▽（本阿弥書店・3300円）

◇小原奈実『声影記』　歌集題の「声影」は「声と姿」の意味である。文語表現と旧仮名遣いによって、独自の抽象的な美しい世界を創る。第1歌集。△遠ければひよどりのこゑ借りて呼ぶそらに降らざる雪ふかみゆく▽（港の人・2420円）

（歌人・中川佐和子）